

生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

トウキとは・・・

トウキ : *Angelica acutiloba* (セリ科) の根を湯通したものです。産地は日本、韓国、中国で、特に奈良県は**大和当帰** (やまととうき) の産地として有名です。この生薬の名前の由来は、**トウキ** を服用することで病が癒えた妻が、家に寄り付かなくなっていた夫に対し『**当** (まさ) にわが家に**帰**るべし』と言ったことから名づけられたといわれています。

【性味】 甘・辛、温

【薬能】 補血調経、活血、散寒、止痛、潤腸通便、生肌

今月のピックアップ

とうき
当帰

トウキの薬理作用・・・

主な成分は精油成分で、フタリド類であるリグスチリドや、他にクマリン誘導体やビタミン B12、フェルラ酸なども含みます。薬理作用として、毛細血管透過性抑制、アジュバンド関節炎抑制、鎮静効果などが挙げられます。

薬能について、**トウキ**は補血作用の効果が有名で活血に働くので血虚に有効です。他に調経作用も重要で、循環改善、内分泌調整に働くほか、子宮筋に対しても調整的に働くことが知られています。



『大和トウキ』って知ってますか・・・？

前述した通り、**トウキ**の産地は、日本、韓国、中国の三か国が挙げられますが、それぞれ基原植物が違います。味を比較しても、中国・韓国で栽培されている**トウキ**は日本のそれよりもピリ辛味が強く、日本の**トウキ**は比較的甘いという違いがあります。

トウキの栽培は古来山城 (京都府南部) と大和 (奈良県) が有名で、17世紀にはすでに始まっており、『大和本草』という書物の中では、中国産**トウキ**と比較して優良品性が記されています。奈良県の**トウキ**は産地名から「大和当帰」と

いう名前で流通するようになり、現在もその生産は盛んです。先日奈良県宇陀市に薬草料理を食べに行っただけです



大和トウキ

が、そこでは**トウキ**の葉のてんぷらなどがいただけましたし、他に**トウキ**を使ったクラフトビールや**トウキ**の苗の販売、**トウキ**の葉の生薬風呂など、**トウキ**が身近な生薬であることが至る所から伺えました。

大和当帰の他に大正後期に北海道で生まれた「北海当帰（ほっかいとうき）」も知られています。はじめ、これは北海道で**大和トウキ**の栽培を始めたのですが、現地の在来種と交雑してしまい、変化したものがこう呼ばれています。北海当帰は、耐寒性がありたくさん収穫できるので、流通生薬の主流となってはいますが品質的には**大和トウキ**に対して次品とされています。

トウキを含む方剤・・・

うんけいとう

温経湯（月経不順、月経困難、更年期障害、不眠、神経症など）

しもつとう

四物湯（産後などの疲労回復、月経不順、月経異常、更年期障害など）

そけいかくけつとう

疎経活血湯（関節痛、神経痛、腰痛、筋肉痛）

とうきしやくやくさん
当帰芍薬散

（比較的体力が乏しく冷え性・貧血の傾向のある者の、月経不順、月経異常、更年期障害など）

毎号上の囲み欄に方剤を列挙するときは、特徴的な方剤を選ぶようにしていますが、今回は前号の**センキユウ**と全く同じものをチョイスしました。**トウキ**と**センキユウ**は一緒に用いられることが多く、他には、温清飲、芎帰膠艾湯、芎帰調血飲、荊芥連翹湯、五積散、柴胡清肝湯、七物降下湯、十全大補湯、女神散、防風通聖散、抑肝散加陳皮半夏など知られています。**トウキ**は、以前の生薬ニュースで紹介した、芍薬、地黄と共に『補血三剤』とよばれ、これに**センキユウ**が加わったものが四物湯です。

トウキと吉益親子の話・・・

漢方医である吉益東洞(1702-1773)（よしますとどう）はある著書の中で**トウキ・センキユウ**（前回の生薬ニュース掲載）について、「その主治するところの知すべからず」と記しています。要するに、その効果があいまいであると言っているようです。また中国産の**トウキ**と比較したときに味が甘いことからその薬用としての価値が低いと捉え、中国の唐当帰と味が似ている**伊吹トウキ**（滋賀県伊吹山に生育している）を使用していたようです。

これに比して、東洞の息子である吉益南涯(1750-1813)（よしますなんがい）は当帰芍薬散を得意な処方としており、彼の治療録「続建殊録」の1/3は当帰芍薬散の治療記録となっています。親子であってもその得意とする生薬は異なり、現代でも医師それぞれ得手不得手があることと同様であったことが伺い知れますね。

